

al-Zalb, 'Abd Allāh 'Alī. 2003. "Qāt," *al-Mawsū'a al-Yamaniyya* (2nd ed.). Ṣan'ā': Mu'assasat al-'Aṭf al-Thaqāfiyya. Vol. 3, pp. 2305–2333.

(松本 弘 大東文化大学国際関係学部教授)

長縄宣博『イスラームのロシア——帝国・宗教・公共圏 1905–1917』名古屋大学出版会 2017年 ix+326+101頁

本書を手にとれば、読者はまず「イスラームのロシア」という主題に一瞬瞠目するのではないだろうか。本書の舞台である20世紀初頭のロシア帝国には総人口の約1割、すなわち約2千万人のロシア・ムスリムが暮らしていた。ウラル山脈はヨーロッパ・ロシアとアジア・ロシアを分ける境界線を成すが、地理的にはそのヨーロッパ部に位置するウラル・ヴォルガ地域において、主としてタタール語で様々な活動を展開したムスリムが本書の主人公である。それは、現在で言えば、領域としてはロシア連邦内のタタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国、民族としてはタタール人、バシキール人といったテュルク系の民族に相当する。

著者は、ロシア帝国を「皇帝への忠誠を要石として多様な人間集団を宗教と身分に分類して権利と義務を分配する国家」「多種多様な人間集団の法慣習に沿って国家が権利と義務を分配し、それを国家とのある種の契約とみる個々の臣民が自身の属す集団の法律に基づいて権利を行使する体制」(5頁)と捉え、ロシア史研究者クルーズ Robert Crews による「宗派国家 (confessional state)」、ワース Paul Werth による「多宗派公認体制 (multiconfessional establishment)」といった視座を受け入れつつ、「帝政最後の10年間にヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会に生じた変容」(7頁)に焦点を当てる。この「変容」こそ、筆者が名付けたところの、ロシア帝国という宗派国家における「ムスリム公共圏」の出現であり、本書の目的はその出現の意味を問い、ムスリム社会の代弁者たちの多様な「実践や行為が織り成す政治」(10頁)を具体的な争点に即して描くことと設定されている。本書で扱われるこれらの争点は、1905年革命(ロシア第一次革命)以降、帝国内で刊行が許されるようになったムスリム定期刊行物において繰り広げられた多様な議論に反映された。

全体の構成としては、序章「帝政ロシアのイスラームと公共圏」で問題の所在と本書の視座、構成、史料と方法が提示され、第1章「帝政末期ヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会」では導入として時代背景とロシア・ムスリム地域の概要、その中でのヴォルガ・ウラル地域の特徴が描かれる。第2章から第8章は3部に分けられ、第I部<宗派国家とムスリム社会>(第2章～第4章)は宗教行政、第II部<地方自治とムスリム社会>(第5章、第6章)は公共空間としての地方自治、第III部<戦争とムスリム社会>(第7章、第8章)は戦争をテーマとしている。終章「帝国の遺産とムスリム公共圏の変容」は総括ならびに帝国以後のムスリム公共圏について論じている。

以下、各章を個別に見ていこう。第2章「イスラームの家の設計図——「良心の自由」と宗務協議会の改革論」は、帝国内のムスリム管理のために設けられていた宗務協議会制度の改革をめぐる論争をトピックとしている。ロシア第一次革命すなわち1905年の十月勅書によって約束された「良心の自由」を「宗教の自由」と解釈することによって、ムスリム共同体はロシアにおける「イスラームの家(ダール・アル＝イスラーム)」の設計図を多様な形で提案し始めた。ここでは、宗務協議会の指導者の資格、宗務協議会の宗教的活動の内実、宗務協議会の帝国内管轄地域という3つの争点が扱われる。そして、こうした議論を通じてムスリム社会内部に「競争的な言語空間」(45頁)としての「ムスリム公共圏」が生まれたことが指摘されるのである。

第3章「マハッラの生活——統治制度から社会をつくる」は、金曜モスクを中心に形成され、教区に類する機能を有していたマハッラ(ムスリム共同体の最小単位)の再編を扱っている。章の副題が示すように、ここでは、宗務協議会を経由して行われる行政手続きを「能動的に利用しながら」(80頁)、マハッラの人々がマハッラの教育活動や財政を自律的な方向へと再編したことが明らかにされる。その過程でムスリム公共圏は各地のムスリムに共通する問題を提示し、離れて暮らす人々の間の議論を喚起したり、「既存の行政手続きとイスラームの用語を接合するための言葉」(80頁)を提供するなど、マハッラの再編に直接働きかけたという重要な指摘がなされている。

第4章「政治的信頼度——カザン県におけるムスリム聖職者管理の実態」は、カザン県庁のムスリム聖職者の任命・罷免等の管理実務を扱っているが、著者は、帝国内への汎イスラーム主義の浸透や非ロシア人の分離主義を懸念する政府にとって、この任免はタタール人に対する政治的信頼度の基準だったと見ている。政府とロシア正教の結託によるムスリム共同体への警察の介入、マハッラの人々によるその受容と利用といういわばマハッラ内政治、そしてタタール知識人の応答が検討され、混迷するマハッラの姿が描かれる。

第5章「カザンの休日——都市空間の民族関係と宗教的権威」は、ロシア人社会とムスリム社会が「直に情報交換し利害を調整」(153頁)できた場として、カザンの市会(都市自治における決定機関)に焦点を当てる。市会とタタール語刊行物において展開された宗教的祝日をめぐる論争が主題である。論争は、ロシア人が多数を占める都市カザンのロシア人とムスリムの間で、またさらに祝日の「正しくイスラーム的で民族的な」(160頁)実践をめぐってムスリム社会内部で生じ、ムスリム公共圏は決裂の様相を呈した。その一方で、定期刊行物が生み出す世論がウファの宗務協議会の権威と競合する状況も生じたことが指摘される。

第6章「マクタブか、公立学校か——義務教育に直面するムスリム社会」は、前章と同じく、情報交換と利害調整の場としてのゼムストヴォ(農村行政機関)に着目し、ムスリム知識人とゼムストヴォが結果として成功裡に協力できたウファ県を主たる事例として、帝国の義務教育の導入に対するムスリム社会の反応を扱っている。双方の交渉と協力は、タタール語刊行物上で展開された「マクタブ(クルアーン学校)か、公立学校か」という論争にはっきりと反映され、やがてムスリム知識人自身の宗教観や民族観に変化をもたらし、「民族性とロシア市民であることの調和」(226頁)を模索する契機にもなったことが明らかにされている。

第7章「国民軍の中の宗派国家——従軍ムッラーの任命とムスリム聖職者の徴兵免除」からは戦争がテーマとなるが、兵役は多様な臣民を統合する手段ともなるとの見地から、軍における「ムスリム問題」が取り上げられる。軍でムスリム兵に対する宗教儀礼を取り仕切る「従軍ムッラー」の設置と、銃後の信仰生活維持のためのムスリム聖職者の徴兵免除をめぐる議論や交渉を通じて、第一次世界大戦期のタタール語刊行物は、ムスリムの間に「ツァーリへの忠誠を示す最高の行為に対する正当な見返りを要求する契約の感覚を尖鋭化させ」(234頁)、宗務協議会や国会への請願につながった。兵役もまた、「その扱い如何によって臣民が統治の正統性を問うことができたという意味で、専制国家の中に公共圏を生み出す契機としても作用」(234頁)したことが指摘されている。

第8章「総力戦の中の公共圏——慈善活動と女性の進出」は、戦時の救援事業の組織化をトピックとし、著者はそこに宗派国家における市民社会の形成を見る。ムスリムは自ら設立した慈善協会や地方自治体の募金などの事業を通じて「総力戦体制に深く参入することで、一定の自立的な行動領域を生み出す」(292頁)ことに成功し、さらに公共圏への女性の参入が始まったことが明らかにされる。また、「敵性民族」(273頁)の存在ゆえに銃後の救援活動が民族ごとに組織されるようになり、民族を基にした組織の萌芽が生じた。その結果、「ロシア・ムスリムを一つの民族と捉えて政治参加を求める知識人」、「その民族の枠組みの中で発言力を増大させた女性」(300頁)という2つの民主主義を担う潮流が出現したと著者は主張する。この点に、著者はヴォルガ・ウラル地域のムスリム特有の「交渉と組織の能力」と、ツァーリと国家に対する「ある種の鋭い契約の感覚」(300頁)を見ており、国家の社会福祉を補った救援事業の盛り上がりは、ムスリムの新しい政治秩序への期待へとつながったと論じている。

終章「帝国の遺産とムスリム公共圏の変容」は、ロシア帝国最後の10年にムスリム公共圏が出現した経緯と意義を総括し、その後、ソ連時代を経て現代に至る流れの中でムスリム公共圏がどうなったのかに言及している。宗派国家の終焉とともに「ムスリムという宗派に基づく行政単位の正統性」(302頁)も失われた。ムスリム公共圏が息を吹き返すのは1980年代後半のペレストロイカの時代のことであり、現在ではその中核にあるのはロシアに「60から70もあるとされる宗務局」(313頁)だという。著者は、1990年代後半からロシア各地のムスリム共同体の再建が民族運動からイスラームを軸としたものへと転換し(313頁)、今や現代ロシアは「市民社会の公的空間で宗教の役割がどの程度認められるのか」(319頁)という、世界の多くの地域に共通する困難な問いに直面していると見ている。そのような状況において、本書の主題であった20世紀初頭のムスリム公共圏の経験に重要な教訓と現代的意義が見い出されている。

以上、本書を概観してきたが、総合的に見て本書は、20世紀初頭のロシア帝国におけるウラル・ヴォルガ

地域のムスリムの社会政治生活とその変容をとらえた重厚な労作であり、ロシア帝国内で営まれたイスラームの生活や、ムスリムの激動の時代との格闘が実に生き生きと描かれ、知的興奮を掻き立てられる。それは、本書が圧倒的な量のムスリム定期刊行物とロシア帝国の行政文書の渉猟と、最先端の理論的研究の批判的咀嚼に支えられているからである。織物に例えるなら、それらを縦糸と横糸として、実に丹念に全体のデザインを練り上げ、柄を整えて、織り上げられた大きな布が本書である。それは、ソ連解体以降、国内外で大きな活力を帯びて進展してきたロシア帝国論と中央ユーラシア近現代史研究の両分野において、著者が議論を重ね、鍛え上げてきたことの賜物だろう。

本書の特筆すべき点は、第一に、「公共圏」や「市民社会」といった概念を20世紀初頭のロシア帝国にあえて適用したことである。これについては、著者が序章で述べている通り、近年の公共圏や市民社会をめぐる議論の見直しを受けて、それらを「到達すべき終点に置くのではなくむしろ理念型として捉えることで社会と政治の変化を分析する方法」(8頁)を模索する立場を明確にしている。ただし、本書において公共圏と市民社会をどのようなものと設定して論を進めるのか、両者はどのような関係にあるのかが若干曖昧であるとの印象は残った。

また、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムの事例を通じて、ロシア帝国の性格、1905年革命の評価、あるいはナショナリズム論などについて再考を促すような、大きな課題への挑戦も随所に見られ、そうした目配りは実に幅広く、また綿密である。

もう一点挙げるとすれば、歴史研究の作品でありながら、著者の現代ロシアひいては現代世界に向ける批判的眼差しと、人間がよりよく暮らせる社会の実現への希求が随所に感じられることである。それは終章の結びの部分で明確に表明されているが、私たちはなぜ歴史を学ぶのかという大きな問いにも関わることであり、そのような著者の姿勢と著述のスタイルも本書の魅力の一部である。

(帯谷 知可 京都大学東南アジア地域研究研究所准教授)

---

井筒俊彦『クルアーンにおける神と人間——クルアーンの世界観の意味論』(鎌田繁監訳、仁子寿晴訳)(井筒俊彦英文著作翻訳コレクション) 慶應義塾大学出版会 2017年 366+23頁

本書は、井筒俊彦が1964年に発表した英語著作 *God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung* (Tokyo: the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, Keio University) の初の日本語訳である。*God and Man in the Koran* は1962年および1963年にマッギル大学で井筒がおこなった講義を元にしており[Rahman 2002: vii]、同書および *The Structure of the Ethical Terms in the Koran* (1959年、1966年に改訂版 *Ethico-Religious Concepts in the Qur'ān*)、*The Concept of Belief in Islamic Theology* (1965年) という相次いで発表された英語著作3冊は、井筒のイスラーム研究者としての地位を不動のものとし、イラン王立哲学研究所やエラノス会議での活躍に道を拓くことになった。

*God and Man in the Koran* が特に脚光を浴びた理由は、言語哲学に基礎づけられた意味論的分析を通じて、特定の時代の言語に内在する世界観を解明しようとする独自の手法に求められよう。このような井筒の方法は、聖書批判学に由来する方法とクルアーンの起源をユダヤ・キリスト教的伝統に求めようとする姿勢を特徴とする当時の欧米のクルアーン研究にも、クルアーン解釈学や文法学といった伝統的な宗教諸学をベースにしたイスラーム圏のクルアーン研究にもない斬新なものであり[竹下 1993: 160–162]、同書は双方の世界で高く評価され、「ムスリムの立場に立つこともないが、「オリエンタリズム」的研究でもない独自のもの」として海外では今なお読み継がれている[鎌田 2017: 361–364]。

本書評では、『クルアーンにおける神と人間』の内容を概略した後、半世紀以上前に発表された著作が今日日本語に訳されることの意義、およびその日本語訳の特徴などについて私見を述べることにする。

本書の構成は以下の通りとなっている。